

2020年度 須坂市小中学校のあり方検討会議 第5回 会議録（概要）

日時 令和3年(2021) 2月16日 9:30~11:27

場所 須坂市役所防災活動室1

1 開 会（関教育次長）

2 議 事

(1) 提言書のまとめ

（事務局より提言書案の説明）

伏木座長：

- 皆さんの方から、ご質問・確認があればお願いします。

勝山委員：

- 非認知能力を共通理解できるか、どう評価するのか、といったところが大事になってくるので、これに関する発信等が更に必要になってくる。
- 須坂市が市立の特別支援学校を持っているという事は大きな強み。特別支援教育の合理的配慮と個別最適な教育は重なり合っているなので、そのスピリッツみたいなものも発信していくことが大事
- そこで行われている、共生社会に向けた発信が大事であることを更に検討して言ったらどうか。

伏木座長：

- 提言を「つなぐ」「のばす」「いどむ」というキーワードでまとめているが、このまとめで良いか。

→異論無し

- それではページを区切りながら見ていく。

《P1～P5》

伏木座長：

- この提言書は小中学生も読んでいいのではないか。子ども達にとっても読みやすいものがベター。教育の専門家でなくても、一般の人でも読みやすいもの、誤解をまねかないものであってほしいと思うので、そんな観点からも指摘して欲し

い。

- IOT 化や GIGA スクール構想等には補足を入れてほしい。

《 P 5 ~ P 6 》

→特に無し。

《 P 7 ~ P 9 》

本多委員：

- 高校生期に育みたい力の部分にもう少し加えたい。
- 成年年齢が 18 歳になることを強く意識してこの時期の教育を考える必要がある。全員が成人して高校を卒業していく。
- 高校を卒業するまでに、より良い地域づくりができる市民とか、他国の人たちと協力してより良い世界を築いていく地球人を育成していく、という観点が高校生期の教育には要になるのではないか。
- そのために、多様性や相互の人格や価値観を受け入れて、多角的に物事を判断できるような、しなやかな知性を育成する必要がある。
- 例えば、地域への興味関心を深めたり、地域に対する責任感とか愛着心を高められるようなプロジェクトとか体験とか、あるいは就業体験とか、国際交流だとか、多様な経験を充実させるという事を加えたい。
- 須坂市が進めているまるごと博物館構想とか博物館の分散型構想については、市民になかなか理解してもらえない、という話があったが、それこそ高校生に任せてもらえないかと思った。
- 高校生は素晴らし力を持っているので、きっとやり遂げると思う。こうしたことをやり遂げていく事で、須坂のことを良く知ったり、責任を感じたり、愛着を持ったりして高校を卒業していく。
- 全員が成人して卒業していくというところが小中とは大きく違うところ。そこを意識した活動が必要だと感じた。

伏木座長：

- 18 歳成人の事、地域への愛着、視野を広げる、社会貢献の体験、そういったものを積極的に織り込んでいくような文章にしていく。

小林教育長：

- 大切なところだと思う。高校生に任せるという事は、高校生を参画させる、一緒に考えていく事をたくさん作っていくという事。

- この発想は、中学生、小学生の時期からいけるのではないか、というふくらみがあるのかなと感じた。

島田委員：

- 中学校期にもふくらませると思う。
- 中学校期はどうしても社会とのつながりであるとか、自分が参画しているという意識を持ちにくい。閉ざされた中で学びが進んでいく傾向が強い。
- 社会とのつながりや参画は、ESD やSDGs の学びの中から感じることができることを、少したったらどうか。

伏木座長：

- 中学校期分は島田委員を調整して欲しい。

佐藤委員：

- 小学校期の最初の3行は、もう少し柔らかい表現にしないと誤解が生じる。P11のような書き方なら納得できる。

伏木座長：

- この3行は小学校だけじゃなく、日本の教育全体に言えること。そんなに強く表現する必要はない。3行はカットでもいい。

垂澤委員：

- 信州やまほいくについては、市内で認定を受けていない園もある。それぞれの園の考え方もあるので、信州やまほいくだけに特化しない表現に変えたらどうか。

伏木座長：

- この部分は垂澤委員と調整してほしい。
- P7の「のばす」と「いどむ」の説明は少しわかりやすくするために枕詞を加えたい。

小林教育長：

- 非認知能力は幼児期から育みたいが、小中高と進む中で、どう育ててふくらませていくのかを、どう表現したらいいのか悩む。

伏木座長：

- 非認知能力を、どういう風に一貫して育てていくのかが見当たらないという事であれば、(3)の「のぼす」の中で、非認知能力をどう伸ばすのかを述べたらどうか。

43:55

《P9～P10》

山岸委員：

- ⑤の家庭や地域の教育力の項目の中身が、子育てセミナーと育成会となっているが、もう少し家庭やPTAからの、能動的なものをここに書いたらどうか。
- 子ども達が地域にどんどん発信していく中で、地域の方や保護者が子ども達をものすごく理解するようになった経験がある。
- 子ども達がやっていることを理解すると、学級PTAの中身が変わった。保護者が子ども達の教科書を全部読んでみよう、ということになり、何かあったときに、子ども達は今ここをやっているのか、子ども達はここに関心を持っているな、という関わりができる。こんな能動的な活動がここに入らないかと思った。

伏木座長：

- 家庭同士が主体的に動き出すような何かいい表現はあるか。
- 家庭教育を行政が主導するのではなく、父親や母親が自主的に繋がっていくような、組織に頼らない発想。
- ④のコミュニティスクールの項目だが、コミュニティスクールからスクールコミュニティへ、という表現がある。
- コミュニティスクールはどちらかといえば学校応援団みたいなイメージだが、スクールコミュニティは、地域住民そのものが学んでいく、地域の中で豊かな文化を創造していく核になる所。地域のプラットフォームとしての学校。学校に協力するというよりも、自らが学びに参加する。その舞台が学校。
- ここに書いてある文章はまさにそんな感じになっているので、表題を調整したい。

近藤委員：

- コミュニティスクールには子ども達が参加できていない。子ども達からも、こういうことをやって欲しいと訴えられれば、もう少し広がっていくのではないかと

伏木座長：

- 子ども達にとって何がベターなのかという発想をここに盛り込みたい。

羽生田委員：

- 子育てセミナーに参加して、もっとリアルに、自分の子ども達が今どういうところで、どんな教育を受けているのか、先生方もどんな苦勞をして、どういう方向へ向かっているのかという話を聞いたときに、町の役員だけではもったいないと思った。
- やることが目的になって、やったことが浸透していかないのが残念。
- 魅力あるセミナーに親を動員させるには、どういう手立てをしたらいいのかは役員もわからないのではないか。
- どうしたら父親や母親の参加を増やせるのかというセミナーの持ち方や手立てを役員が持たないと変わらない。

伏木座長：

- 親もいろいろと忙しくて、学校も PTA も悩んでいると思うが、忙しくても集まることに意義がある、集まってよかった、と思えるようなことを繰り返していくしかないかもしれない。

事務局：

- 子どもも参加することで、参加者の幅が広がるのではないか。

伏木座長：

- 子どもの取り合いが起きている。子どもの目線で、部署を越えて一緒に考えていけばもう少し状況は変わってくるかと思う。

《 P 1 0 ~ P 1 2 》

山岸委員：

- ④の多様な価値観や背景を持った多様な他者との共存の項目の最後の 2 行は違う表現に変えた方がいい。誤解を生じる。

伏木座長：

- では表現を変えて欲しい。
- ③の項目で、個別最適な学びの記述が弱い。個別最適な学びとは個別学習を意味しているわけではなく、多様性の事。一人ひとりの子どもの違いに、もう少し合わせていこうというのが最大のコンセプト。④の多様な価値観の項目に入れる方法もある。

勝山委員：

- 特別支援教育については②と④の項目が関連すると思うので、項目の順番を変えたらどうか。

伏木座長：

- ②と③を入れ替えてスッキリさせる。

《P 1 2 ~ P 1 3》

月岡委員：

- ESD については最初からグローバルな視点を持って、その視点から須坂を見るという方がいいのではないか。

(月岡委員から ESD 推進計画の説明)

1:15:09

伏木座長：

- ESD については教育大綱にも反映させてほしい。グローバルな視点を持って須坂を見るという事は大賛成。
- ふるさとの事を語れる人になってほしい。日本人の留学生の多くはふるさとを語れない。
- 必死になって努力する親も素敵な存在。運動や勉強等に自信の無い子や、友達が少なく悩んでいる子には、あなたのままでいいんだよ、須坂を語れる人になればいいんだよ、というメッセージになるのではないか。

山岸委員：

- ④の項目は、人口が減ってくるから、小中一貫とか中学校区の連携をやる、ICTが入ってくるからそれをやる、という風にとられてしまうのではないか。
- 元々、9年間の学びには大切な部分があって、何々をやっていくという内容の方がいいと思う。
- こういう成果があるから、こんな対応ができるという、一貫教育とか、学校間連携のメリットを入れるべきでは。そういう教育の良さがもう少し盛り込めたらと思う。

本多委員：

- 異質性と出会える環境があればいいんだなと、思い直している。
- 須坂市が世界の中の一つの町であるという認識が大事。
- 大切なのは、異質性とか多様な価値観に出会えるという環境

事務局：

- ④の標題はどうするか。

本多委員：

- 標題を変えるとみんな安心してしまう。

山岸委員：

- 人口が減るからやる、という表現でなければいい。

本多委員：

- 9年間の成長の流れを出したい。
- 単なる数合わせに終わらせないようにするという対応では生ぬるいと思う。
- 今から10～11年後の子ども達が、どういう環境で学ぶかということを考えたい。
- 人口減少を9年間の学びの中に上手に落とし込むというタイトルにしたい。

伏木座長：

- 待ったなし、人口減少社会に生きる世代への責任ある教育、でどうか。

《全体を通して》

山岸委員：

- P12 一番下の「対比」は「対峙」の方がいい。

島田委員：

- P7のイメージ図だが、「のぼす」の非認知能力が大きなベースであることを考えると、逆三角形の方がいいのではないか。

伏木座長：

- イメージ図の言葉は、重なり合った所に入った方がいい。

勝山委員：

- 働き方改革にもう少し踏み込む方法はないか。

近藤委員：

- 働き方改革は保護者の理解や認識も必要になる、ということも入れた方がいい。

伏木座長：

- 教員だけでなく、行政も保護者も、今までやってきたことが当たり前ではなくて、本当にそれが必要なのか、なぜ先生がそれをやるのか、という事も含めて意識改革が必要
- 行政、学校、教員、保護者が一丸となってこの問題を考えていく事が大事
- 委員の皆さんからいろんな貴重な意見をいただきました。事務局は再調整をして各委員に確認をしてほしい。
- 基本的な方向はすごくいいと思う。このあとは教育委員会の方でこれを形にしていきたいと思う。

(2) 来年度の検討会議について

(事務局より、2021年度子どもの学びのあり方検討会議概要案の説明)

関次長：

- 本日の修正については意見をいただいた方と直接調整しながら案が取れるような形にしてお送りしたい。

3 教育長あいさつ

- スピードスケート選手の小平さんの語る言葉がすごいと思っている。
- 自分から学ぶ子ども達、自分から学びを手にしていく子ども達を育てるためにどうしたらいいか。
- 小平さんはオリンピックに向けたインタビューで「用意された環境を歩くのは好きじゃない。自分で選び、失敗も成功も受け入れる」と言っていた。
- オリンピックに向かう心境を聞かれたときに「これから私、小平奈緒という生き方をしたい」と言い、ガンジーの「明日死ぬかのように生きよ、永遠に生きるかのように学べ」という言葉を引用して「私はそういう生き方をしたい」と言っていた。彼女は苦しい時でも自分を大事にして生きているという事がよく分かる。
- こういう「私はこう生きる」と言える子供達になって欲しいと思う。それにはどうしたらいいかという事が、私たちが知恵を絞っているテーマなんだと思う。
- 子どもによって学びの長さも、学び取る時間も違う。個別最適化とは、今までの枠の中に子ども達を合わせようとしていたものから、一人一人の子どもの学びに寄り添うものになっていかなければならないと思う。
- 提言の中にある ESD の取り組みも、現場にとって負担にならないように、できるところからゆっくりにゆっくりにやっていくというスタンスも伝えていかなくて

はいけないと思っている。

- 来年度以降の議論は、単なる勉強会にならないように、いろいろな人の意見が取り入れられるように広げていければいい。
- 一つひとつの議論が、学びって面白い物であり、子ども達にとってもワクワク感を引き出す、大事なエネルギーになる営みである事を、市民の皆さんにも分かっていたいただきながら、これからの10年、20年の学びの姿を作っていきたいと思っている。

4 閉 会（関教育次長）